

読賣新聞

2009年(平成21年)

8月16日 日曜日

静岡沖地震 半壊2棟全壊なし

短周期「プレート内型」要因？

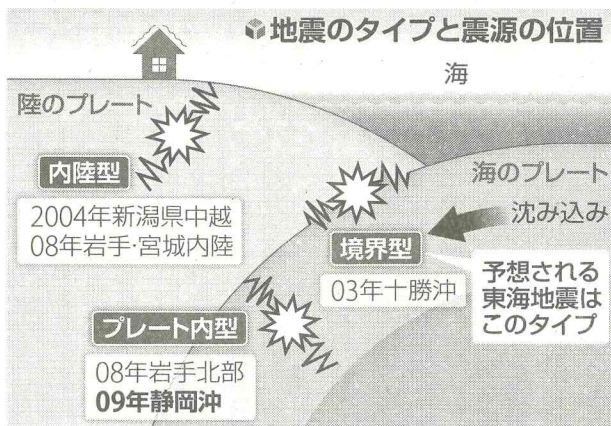
11日に起きた静岡沖地震では、約6000棟の住宅に被害が出たが、2棟が半壊しただけで、全壊はなかった(総務省消防庁調べ・14日現在)。

ところが、2005年3月の福岡県西方沖地震では、最大震度が同じ6弱なのに、全半壊が497棟に達している。なぜこんなに違うのか？

地震は、震源となる場所によってタイプが異なる。静岡沖地震は、日本列島の下に潜り込む海側のプレート(フィリピン海プレート)の中で起きた「プレート内型」地震だった。これに対し、福岡の地震は、陸側のプレートで起きた「内陸型」。予想される東海地震は、2枚のプレートの接面で起きる「境界型」だ。

昨年7月に起きた岩手北部の地震は、静岡沖と同じプレート内型で、やはり最大震度は6弱だったが、建物被害は全壊1棟にとどまった。このタイプの地震は、震度が大きなくても、建物を壊す力が小さくなる傾向があるようだ。

海側のプレートは、上に重い陸のプレートが乗っているため、大きな圧力がかかっ



いる。プレート内の岩石は高圧で固まっております、壊れにくい。東京大学地震研究所の古村孝志教授は「地震のエネルギーの大きさに比べ、壊れる岩盤の面積が小さい。このため揺れの周期が小さく、揺れる時間も短い地震が多いのではないかと推測している。

備えは油断禁物

実際、同研究所の瀧澤一教授によると、海のプレートの中で起きる地震は、揺れ1回の周期が1秒以下の、ガタガタという小刻みな揺れの成分が多い。花瓶や置物が飛んだり、倒れたりしやすいが、家は壊れにくい。筑波大の境有紀准教授が、今回の地震波

を分析したところ、主な揺れの成分は0.3〜0.5秒と、やはり短周期だった。静岡県は2001年、古い建物の耐震化を促す「TOK A1-0」プロジェクトを始めた。08年度末現在で、県内住宅の耐震化率は8割に達したと推計されている。

被害が少なかったのは、この対策の効果と指摘する意見もあるが、静岡大防災総合センターの牛山素行准教授は「耐震化のおかげと考えるのは早計」とみる。もしプレート内型とタイプの異なる地震があったら、被害が拡大した恐れがあるからだ。「理由をしっかりと検証することが大事だ。6弱でも大丈夫と信じて、備えがおろそかになる」と戒めている。